不登校を生まない集団を育む学級活動のあり方
～コミュニケーションを高める継続的なグループ体験活動を通して～

要約

今日、少子高齢化、核家族化、情報化などが急激に進み、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。近年の時代の中では人とのかかわり方を身につける自己表現の機会の減少や体験不足などが原因となり､集団の中で人間関係をうまく構築することができず、いじめや不登校など、さまざまな問題を引き起こしている。そこで学校、学級は、互いに相手を尊重することを基盤として社会性を身に付け、人間関係のあり方を学ぶ集団の場として、果たすべき役割はますます重要なものになってきている。このことから、互いのよさを認め合い良い人間関係をつくるための思いや考えを言葉にして伝えられる子どもを育てていくことは大変重要なことであり、子どもたちの将来にあたっても必要なことと考えられる。

所属校では、自分の気持ちをうまく伝えることができなかったり、他者の気持ちを考えて行動や発言ができなかったりと、生徒の対人関係形成能力の低さを垣間見ることができる。このように対人関係形成能力が未熟なため、日常の様々な場面で問題を適切に解決できない生徒が多い。そのため、友人関係が崩れ、問題行動を起こしたり、不登校傾向に陥ったりする場合もある。特に所属学年では不登校傾向の生徒が多い。また、他者との信頼関係が希薄な傾向も見られる。これらのことから、生徒一人一人が自分の気持ちを伝え合い、自他を理解し、居心地の良い学校・学級を作り上げていく必要性があると考える。

以上のようなことから、次のような研究仮説を設定した。

学級活動の場において、継続的なグループ体験活動を位置づければ、子どもたちは体験を通してスキルを身につけ、コミュニケーション能力を高めることができるので、良好な人間関係を構築することができ、不登校を生まない学級集団になるであろう。

３つのスキル学習(構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニング､ソーシャルスキルトレーニング)を段階的に位置づけることによって､子どものコミュニケーション能力を高めていく。

① ソーシャルスキルトレーニング(対人関係における「よい聞き方」について)

② アサーショントレーニング(ア：誤ってコンセントを抜いた時　イ：頼んでいたものを買ってくるのを忘れていた場合　ウ：仲間に入ろうとしたときに断られた場合)

③ 構成的グループエンカウンター(お誕生日おめでとう)

研究の成果と課題

○ 継続的なグループ体験活動は子どもたちにとって、様々なスキルを習得する機会になり、コミュニケーション能力の向上に効果的だということがわかった。

● グループ体験活動を学校全体の年間計画に盛り込めるように、必要性を発信し、日常の生活の中でスキルを身に付ける学習の機会を設定していけるようにすること。

キーワード： コミュニケーション能力　ソーシャルスキルトレーニング　アサーショントレーニング　構成的グループエンカウンター

１　主題設定の理由

（１）社会の実態から

今日、少子高齢化、核家族化、情報化などが急激に進み、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。近年の時代の中では人とのかかわり方を身につける自己表現の機会の減少や体験不足などが原因となり､集団の中で人間関係をうまく構築することができず、いじめや不登校など、さまざまな問題を引き起こしている。また、子どもたちの現状として携帯電話やオンラインゲームなどの普及から、テレビ画面上のバーチャルな体験や間接的な体験が増えている一方、直接的に人とかかわる機会は減少している。このような現状に伴いコミュニケーション能力の低下が叫ばれており、社会的にも大きな問題として捉えられている。そこで学校、学級は、互いに相手を尊重することを基盤として社会性を身に付け、人間関係のあり方を学ぶ集団の場として、果たすべき役割はますます重要なものになってきている。本県においても、中学生の不登校生徒数は全国で８番目に多く、早急に対応すべき問題として考えられている。このことから、互いのよさを認め合い良い人間関係をつくるための思いや考えを言葉にして伝えられる子どもを育てていくことは大変重要なことであり、子どもたちの将来にあたっても必要不可欠なことと考えられる。

（２）学校・学級の実態から

所属校では、自分の気持ちをうまく伝えることができなかったり、他者の気持ちを考えて行動や発言ができなかったりと、生徒の対人関係形成能力の低さを垣間見ることができる。このように対人関係形成能力が未熟なため、日常の様々な場面で問題を適切に解決できない生徒が多い。そのため、友人関係が崩れ、問題行動を起こしたり、不登校傾向に陥ったりする場合もある。特に所属学年では不登校傾向の生徒が多い。また、他者との信頼関係が希薄な傾向も見られる。これらのことから、生徒一人一人が自分の気持ちを伝え合い、自他を理解し、居心地の良い学校・学級を作り上げていく必要性があると考える。

そこで、構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニングを通して、自己肯定感や受容感を感じさせながら良いコミュニケーションのスキルを習得、活用をさせたい。これらの実践を通してコミュニケーション能力を高めることが対人関係能力を高めることに繋がり、不登校を生まない集団を育むことになると考え、本主題を設定した。

２　主題の意味

（１）　「不登校を生まない集団」とは

「不登校を生まない集団」とは、生徒が学校に行きたいと感じられるような魅力ある学級集団のことである。そのためには集団の中で「自分は大切な存在なんだ」､「自分はかけがいのない存在なんだ」というような自己肯定感や「自分自身が周りから受け入れられている」､「他者を受け入れている」というような受容感がある雰囲気が基盤になる。その上で他者に自分の思いを伝えたり、相手のメッセージを受け取ったりすることができるような学級集団のことである。

本研究では、「不登校を生まない集団」の姿を以下のように考える。

○自分のことを自分は大切な存在、かけがえのない存在だと感じることができるようにすること　(自己肯定感) ○自分自身が周りから受け入れられている、他者を受け入れていると感じることができるようにすること　(受容感) ○他者に自分の思いを伝えたり、相手のメッセージを受け取ることができるようにすること　(コミュニケーション能力)

(２)「コミュニケーションを高める継続的なグループ体験活動」とは

「コミュニケーションを高める継続的なグループ体験活動」とは構成的グループエンカウンター(SGE)やアサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニング(SST)を継続的に行い、受容感や自己肯定感、コミュニケーション能力を高めていく学習である。本研究においては、３つのスキル学習を段階的に位置づけることによって、子どものコミュニケーション能力を高めていく。まず、相手との関係づくりの土台として、「よりよい聴き方」についてのスキルが身に付けることができるように、「聴き方」についてのソーシャルスキルトレーニングを位置づける。次に、身近によくある場面設定を行い、相手も自分も肯定的に対応するスキルを身に付けることができるように、アサーショントレーニングを位置づける。そして、実際のコミュニケーションにおいて自分のよさや相手のよさを実感することができるように、構成的グループエンカウンターの体験活動を位置づける。

つまり、三つのグループ体験活動を段階的に位置づけることで、子どもたちはやり方を知り、自ら体験することを通して、コミュニケーション能力を高めていくことができると考える。

３　研究の目標

コミュニケーション能力が高い生徒を育てるために、継続的なグループ体験活動の有効性を明らかにする。

４　研究の仮説

学級活動の場において、継続的なグループ体験活動を位置づければ、子どもたちは体験を通してスキルを身につけ、コミュニケーション能力を高めることができ、良好な人間関係を構築することができ、不登校を生まない学級集団になるであろう。

５　研究の内容と方法

(１)研究の対象

小郡市立大原中学校　第２学年１組(在籍 39 名　男子 21 名　女子 18 名)

(２)研究の内容と方法

構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニングを通してコミュニケーション能力を高めていく。

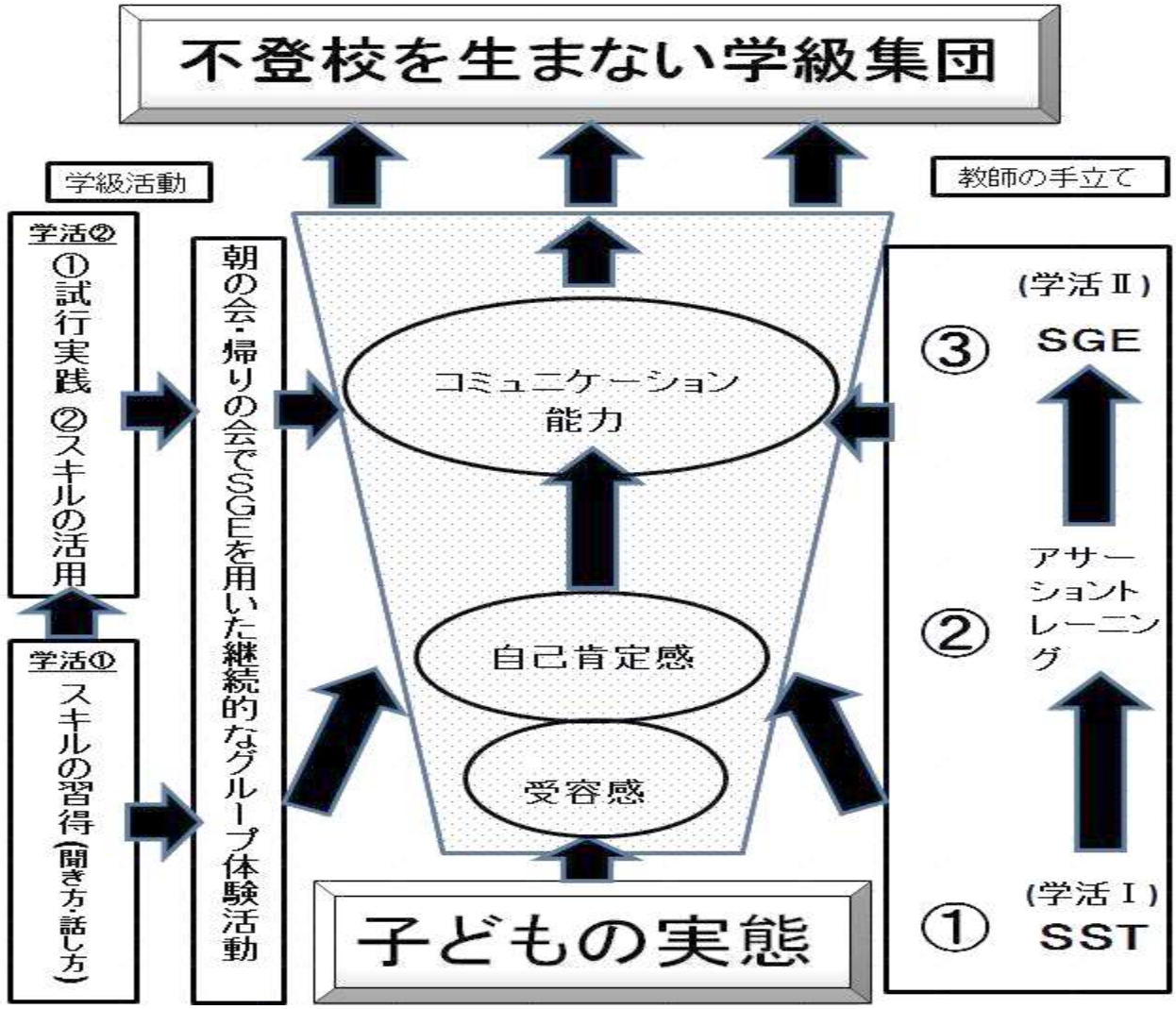
実践

①　ソーシャルスキルトレーニング（対人関係における「よい聞き方」について） ②　アサーショントレーニング（ア：誤ってコンセントを抜いた時　イ：頼んでいたものを買ってくるのを忘れていた場合　ウ：仲間に入ろうとしたときに断られた場合） ③　構成的グループエンカウンター（お誕生日おめでとう）

６　研究計画の概要

4 月	研究計画の審議	10 月	授業実践②
5 月	研究主題の設定	11 月	授業実践③
6 月	実態調査	12 月	データ分析・研究のまとめ
7 月	実践の構想審議①	1 月	研究のまとめ
8 月	実践の構想審議②	2 月	研究報告会
9 月	授業実践①	3 月	

７　研究の構想図



８　研究の実際

（１）実践事例１

活動主題　「よい聞き方」

ソーシャルスキルトレーニングを用いて

主眼　対人関係における「よい聞き方」について、理解することができるようにする。

〈エクササイズの概要〉
① 教師のモデリングを見る。（よい聞き方・悪い聞き方）
② ２人組のペアになり、話し手と聞き役になり、お互いによい聞き方、悪い聞き方の体験をする。
③聞くときに大切なことを確認する。
④再度、ペアでよい聞き方で体験をする。

○まず、教師２人によるモデリングを行った。モデリング①は「最近頑張った事」というテーマで悪い聞き方で会話をした。生徒の感想としては「寂しそう」、「聞いていないように見える」等の意見が出た。モデリング②は「私の宝物」というテーマで良い聞き方で会話をした。生徒からは「楽しそう」、「興味がある」、「互いの視線が合っている」などの意見がでた。モデリング①と②を通して良い聞き方と悪い聞き方の違いを理解することができたと思う。その後ペアに分かれて「好きな芸能人」、「好きなテレビ番組」の話題で会話を行った。その中で話し手と聞き役になり、良い聞き方と悪い聞き方で体験をした。悪い聞き方では「いらいらする」、「独り言のよう」、「伝わっているか分からない」などの意見が生徒から出た。また、良い聞き方では「楽しい」、「会話が弾む」などの意見が出た。シェアリングでは「話し手に自分が聞いているという姿勢がわかるようにする」、「話を最後まで聞く」、「あいづちをうつ」、「共感しながら聞く」等の意見が出され、概ね本時授業の主眼の理解ができたのではないかと考える。

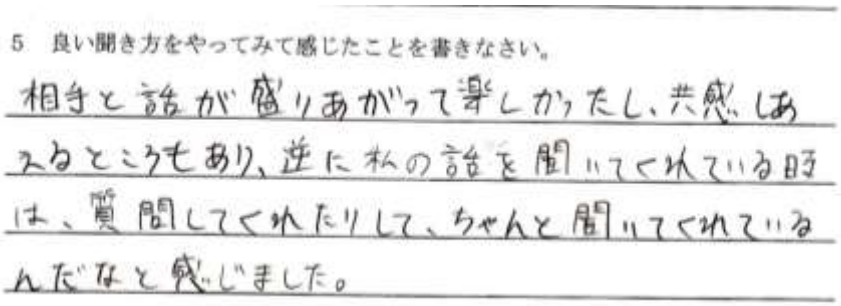
【写真１　モデルをもとに体験している様子】

○生徒Ａの様子

生徒Ａは初めてのことや新しい環境に慣れるのにとても時間のかかる生徒である。不安や緊張から体調を崩してしまう程、デリケートな生徒である。友人関係においての会話が苦手でコミュニケーションを取ることは苦手である。また、みんなと何かを協力して行う、取り組むこともあまり得意ではない。

授業を進めていく中で、笑顔が増えて、楽しそうにペアでの体験を行っていた。また、感想から話を聞く時は「相手の目を見る」、「相手の正面を見て」などが大切であると答え

ている。これは生徒Ａが日頃、できていないことである。このことから、生徒Ａにとっても実践１の授業はとても有意義な物になったと考える。


5　良い聞き方をやってみて感じたことを書きなさい。

相手と話が盛りあがって楽しかったし、共感しあえるところもあり、逆に私の話を聞いてくれている時は、質問してくれたりして、ちゃんと聞いてくれているんだなと感じました。

【資料１　生徒Ａの感想】

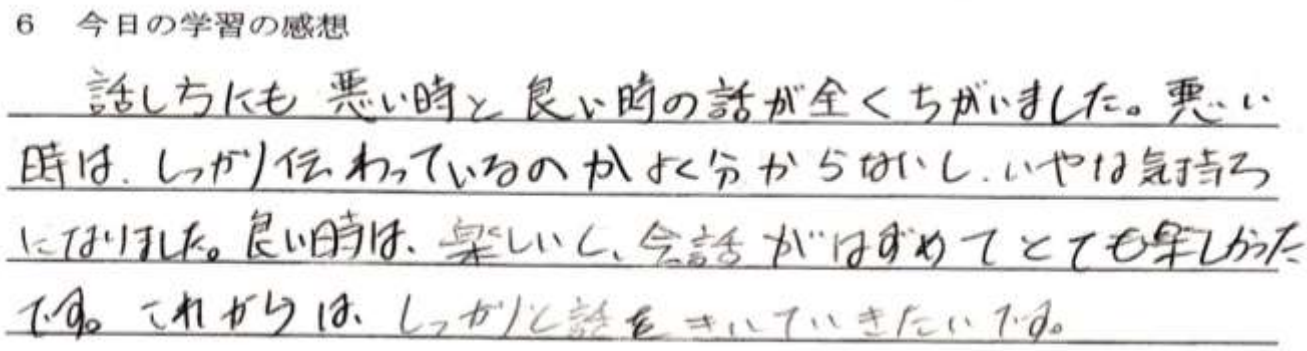
○生徒Ｂの様子

生徒Ｂは低学力であり、自分の思いや考えを相手に伝えるのが非常に苦手である。性格も内気で大人しく、日常の学校生活からも友達と積極的に会話をしたり、何かに取り組む姿等は見ることがなかなかできない。学校生活の中でもコミュニケーション能力の低さが覗える生徒である。また、クラスの中でも特定の生徒とは仲が良いが、それ以外の生徒とは友好な関係を築くことができていない。

授業を通して、始めはペアの相手が異性だったということで緊張している様子であったが、体験が進むにつれ徐々に慣れて楽しんでいるようだった。

生徒Ｂの感想にも「話をしている人だけでなく聞く人も話すことが大切」、「目を見てしっかり聞くことが大切」と書いている。この感想からも分かるように非常にペア活動が盛り上がっていた。いつも、あまり笑うことがない生徒Ｂも笑顔で体験活動を行うことができていた。

【写真２　ペアで活動する様子】


6　今日の学習の感想

話し方にも悪い時と良い時の話が全くちがいました。悪い時は、しっかり伝わっているのかよく分からないし、いやな気持ちになりました。良い時は、楽しいし、会話がはずめてとても楽しかったです。これからは、しっかりと話をきいていきたいです。

【資料２　生徒Ｂの感想】

○良い聞き方（ソーシャルスキルトレーニング）の授業実践の成果（◎）と課題（●）

◎　教師のモデリングで良い聞き方と悪い聞き方の違いを生徒が理解できた。

◎　良い聞き方をすると「会話が楽しい」、「会話が弾む」ということに生徒が気付くこと

ができた。

◎　よい聞き方のポイントは「あいづちをうつ」、「共感しながら聞く」、「話し手に自分が聞いているという姿勢が分かるようにする」、「話を最後まで聞く」等と言うことを生徒が理解できた。

◎　コミュニケーションが苦手な生徒が楽しみながら授業を進められた。

●　学習プリントの発問が似たような項目があったので生徒が重複して同じような回答をしてしまった。

（２）実践事例２

活動主題　「お誕生日おめでとう　間違い探し」

構成的グループエンカウンターを用いて

主眼　グループワーク（班活動）を通して、お互いに認め合うこと、協力する大切さに気付くことができるようにする。

〈エクササイズの概要〉
①班に１枚ずつ配られた絵を見る。
②絵を廊下に見に行く順番を班で決める。
③廊下に張ってある絵と配られた絵の違いにチェックを入れる。
④時間内に何個探すことができたか班ごとに発表させ、他の班の様子を知る。
⑤教師が正解を発表し、班でどのくらい正解できたか確認する。

○廊下の絵を見に行く前に、班で「作戦をたてようぜ」や「このあたりが間違ってそうだね」などの会話が聞かれていた。このことからも今からのグループワークに対する意欲が教師にも伝わってきた。また、途中で「間違いは 22 カ所ある」と生徒に伝えると、「エーッ」という声が上がり、グループワークに熱中しているのが良く分かった。エクササイズが始まると班で決めた順番通りに絵を見に行き、覚えてきたことを必死にジェスチャーで班の仲間に伝える姿が見られた。

実践１よりも同時に活動する人数も増えるエクササイズなので、生徒のやる気を出させ、仲間とうまく気持ちを合わせないとできないためより活発な交流が求められる。また、協力をして１つのことを成し遂げる活動であり、一人一人に責任が求められる。

シェアリングでは「班で計画を立て、楽し

【写真３　実践２の様子】

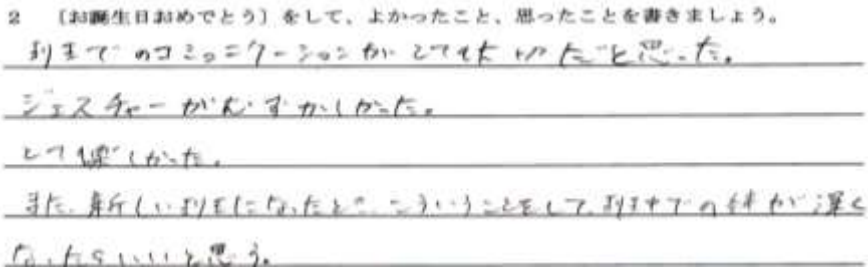
く協力できてよかった」や「すごいと思ったのは○○○君と△△△さんです・・・」、「○○○くんのいつもと違う一面が見れた」等の感想が出された。

○生徒Ｃの様子

生徒Ｃは人との関わりをもつことがとても苦手な生徒である。学校の生活面ではその日の調子が良いと授業にも積極的に参加するときもあるが、調子が悪いと居眠りをしたり、私語が多くなったりする。また、行動面も思ったことをすぐに口に出したり、思いついたことを悪いとは分かっていながらもやってみたりとトラブルを起こしがちな生徒である。そのため、生徒Ｃと仲が良く、うまくやっていける生徒とはとても仲が良いがそれ以外の生徒は生徒Ｃと距離を保つことが多い。そのため交友関係も偏っており、人間関係がとても固定化されている。

【写真４　協力して活動する様子】

また、様々な体験活動を行っても、感想には「楽しかった」だけしか書かない。しかし、今回のエクササイズでは、「コミュニケーションがとても大切だと思った」や「新しい班になったときにこういうことをして、班での絆が深くなったらいいと思う」等と記入している。



2　〔お誕生日おめでとう〕をして、よかったこと、思ったことを書きましょう。

班までのコミュニケーションがとても大切だと思った。

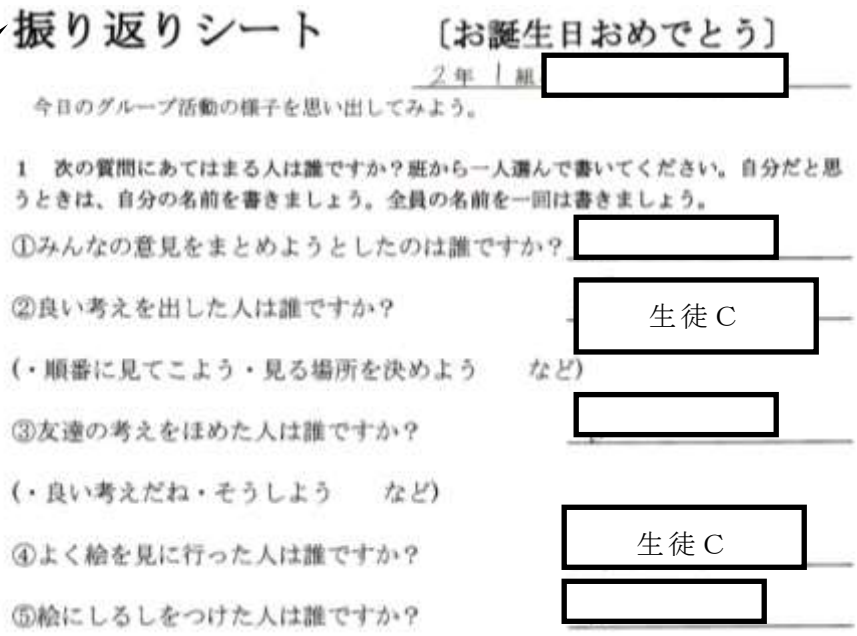
ジェスチャーがむずかしかった。

とても楽しかった。

また、新しい班になったときにこういうことをして班での絆が深くなったらいいと思う。

【資料３　生徒Ｃの感想】

生徒Ｃと同じ班の生徒の振り返りシートである。生徒Ｃの名前が書かれていることから、班のメンバーからの生徒Ｃに対する理解が深まり、距離が縮まったようである。



振り返りシート　〔お誕生日おめでとう〕

２年１組 [redacted]

今日のグループ活動の様子を思い出してみよう。

1　次の質問にあてはまる人は誰ですか？班から一人選んで書いてください。自分だと思うときは、自分の名前を書きましょう。全員の名前を一回は書きましょう。

①みんなの意見をまとめようとしたのは誰ですか？ [redacted]

②良い考えを出した人は誰ですか？ 生徒Ｃ

(・順番に見てこよう・見る場所を決めよう　など)

③友達の考えをほめた人は誰ですか？ [redacted]

(・良い考えだね・そうしよう　など)

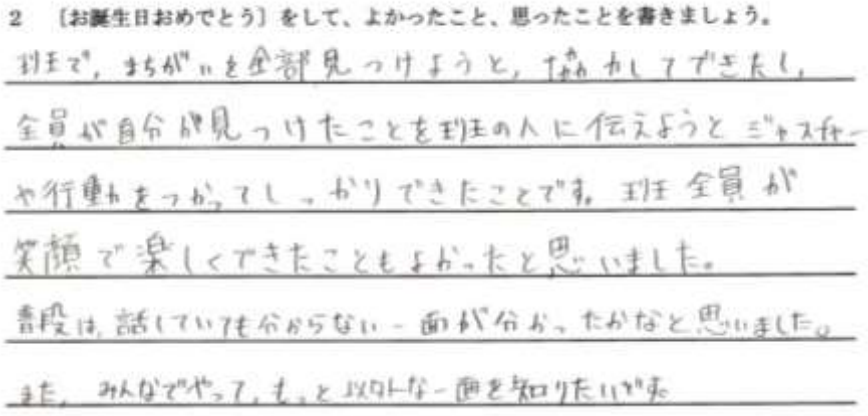
④よく絵を見に行った人は誰ですか？ 生徒Ｃ

⑤絵にしるしをつけた人は誰ですか？ [redacted]

【資料４　生徒Ｃと同じ班の生徒の振り返りシート】

○生徒Ｄの様子

生徒Ｄは学力もあり、やればできる力を大いに持っているが、自分に自信がなく、人との関わりに苦手意識を持っている。また、自分の気持ちをはっきり言うことができないため、嫌なことも嫌と言えない場合がある。「お誕生日おめでとう」の構成的グループエンカウンターを行うことによって、生徒Ｄはコミュニケーションの楽しさや他人に興味をもつことができた。これは自己存在感を高め、コミュニケーション能力を向上させることにつながったと考えられる。


2 〔お誕生日おめでとう〕をして、よかったこと、思ったことを書きましょう。

班で、まちがいを全部見つけようと、なかよくできたし、全員が自分が見つけたことを班の人に伝えようとジェスチャーや行動をつかってしっかりできたことです。班全員が笑顔で楽しくできたこともよかったと思いました。普段は、話していても分からない一面が分かったかなと思いました。また、みんなでやって、もっと以外な一面を知りたいです。

【資料５　生徒Ｄの感想】

今回の授業のシャアリングでも様々な生徒が多くのことに気付き、班での交流を増やすきっかけとなった。また、どの班も必死にグループワークを行っており、教室の中に熱気があり雰囲気が大変良かったと感じた。生徒の意識の中に「みんなで協力して、絶対に間違いをみつけよう」という気持ちがあるようであった。

○「お誕生日おめでとう　間違い探し」の授業実践の成果（○）と課題（●）

- ○　授業前まであまり会話がなかった生徒同士が話をする機会が増えた。
- ○　エクササイズを通して、友達の意外な一面に気付いたり、班で協力して問題解決に取り組むことによって達成感を味わうことができた。
- ●　シェアリングでの意見交流が数名しかできず、学級全体の交流にすることができなかった。

９　研究のまとめと今後の課題

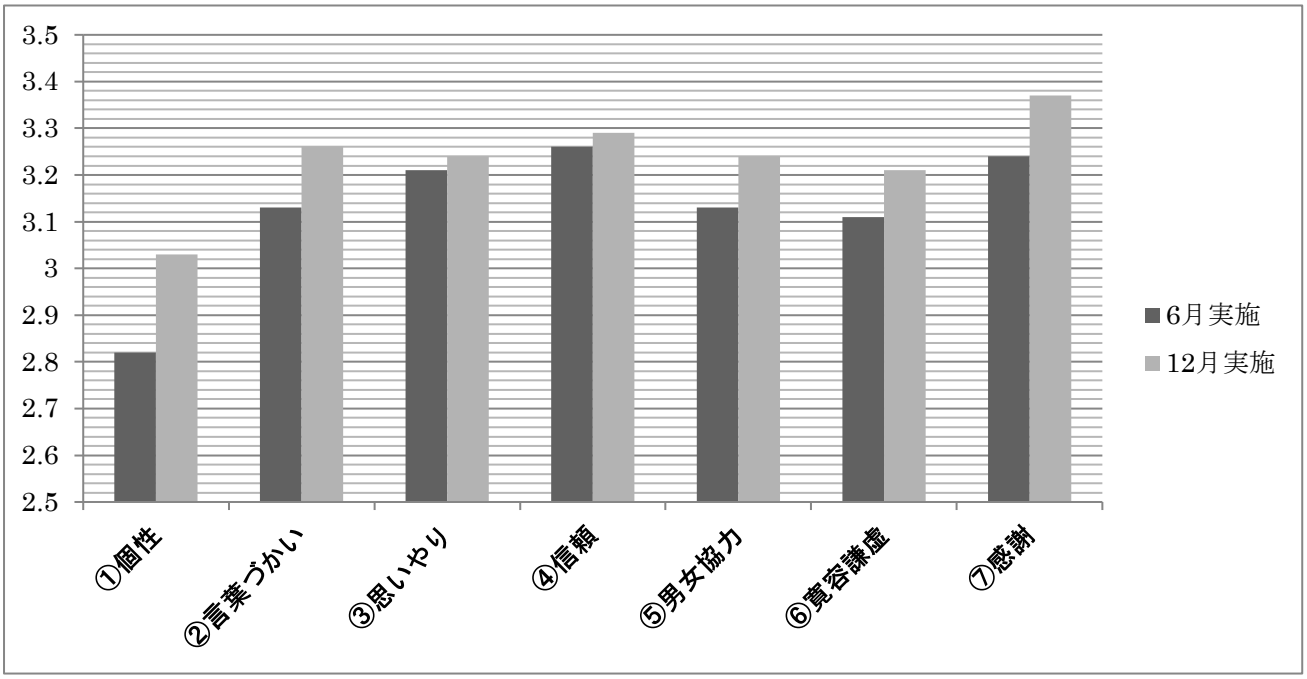
本研究の実践の成果を検証するために、６月と１２月に行った道徳性調査をもとに考察する。

道徳性調査

【項目】

①自分のよさを発見し、そのよさをはっきすることはできますか。
②とき、ところ、場合を考えた言葉づかいや態度をとることはできますか。
③他の人に対し、思いやりの心をもって接することはできますか。
④信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うことはできますか。
⑤異性のよさを互いに認め合い、協力して生活することはできていますか。
⑥それぞれの立場や個性を認め合い、広い心をもって学び合うことはできますか。
⑦多くの人の支えによって自分があることを自覚し、感謝することができますか。

【道徳性調査から】６月と１２月に実施



質問項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
上昇ポイント	０．２１	０．１３	０．０３	０．０３	０．１１	０．１０	０．１３

成果(○)と課題(●)

○　すべての質問項目において、ポイントが上昇している。これはソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング、構成的グループエンカウンターという活動を体験することによって、受容感や自己肯定感、コミュニケーション能力が高まったからであると考える。

○　項目①の「自分のよさを発見し、そのよさをはっきすることはできますか。」の質問に関しては、０．２１ポイントも数値が上昇している。これは構成的グループエンカウンターを行うことで、子どもたち一人一人が、自分のよさに気づき、自分の力を発揮し、友達と認め合うことにより、学級への貢献感・所属感を高めることができたからだと考える。

○　上昇ポイントが高かったのが項目②と項目⑦である。特に、項目⑦の「多くの人の支えによって自分があることを自覚し、感謝することができますか。」に対する数値が伸びたのは本研究の成果だと考える。この項目はアサーショントレーニングで自分も相手も肯定的に捉えるスキルを学び、ソーシャルスキルトレーニングで会話には「よりよい聴き方」があることを学んだからだと考える。

○　本研究で継続的なグループ体験活動は子どもたちに様々なスキルを習得する機会になり、コミュニケーション能力の向上に効果的だということがわかった。

●　グループ体験活動を学校全体の年間計画に盛り込み、日常の取り組みの中でスキルを身に付ける学習の機会を増やしていくことが大切であると考える。

＜参考文献＞

・エンカウンターで学級活動１２か月　中学２年生　（明治図書）
・構成的グループエンカウンター　ミニエクササイズ５０選　中学校版　（明治図書）